

1 全国大会・ブロック大会

U12世代においては、身体的成長やバスケットボール技術の向上とともに、社会とのつながりや仲間づくりにより社会性を養うことも必要とされています。その実現のために、日常生活の範囲を超えたエリアでの競技会にて交流を行うことで、見聞や体験機会を増やししながら、社会性の向上が図れるよう環境整備に努めています。また、競争と楽しみという両面から、同レベル同士の競争機会を増やすことや目指すべき目標を身近に設置することによる活動環境の活性化、広くブロックや全国で活動している仲間との仲間意識の高まりなどを図るため、ブロック大会・全国大会を開催しています。**大会は「ミニバスケットボールを通じて、少年少女の体力づくりと社会性の育成を図るとともに、バスケットボールの普及発展を図ること」を目的として、順位付けを目的とせず競技力向上、社会性の向上、交流・経験の場としての要素も含めながら、参加チームのゲーム数確保や参加プレーヤーの出場機会の確保に向けた取り組みを行っています。**また同時に、コーチや保護者、開催スタッフなど大人に対する学習の場としても位置付けており、子どもたちを取り巻く環境の向上にも努めています。

大会に参加できるチームは、数に限りはありますが各都道府県からの推薦により決定されており、各大会の趣旨とレベルに応じたチームが集えるようにすることで、その効果が最大限生かせるような条件としています。また、より多くのチームに機会を与えるために、全国大会とブロック大会は同一チームの出場を禁じています。

ブロック大会においては、開催地を構成都道府県内で毎年変更するなど、様々な会場や地域で行うことで、競技力向上や仲間づくりだけでなく、各地域での社会的な知識や見聞による学習機会も魅力となっています。出場チームにとっては各都道府県からの代表としての責任感や緊張感を持ちながら参加することも良い経験の場となっています。また、各開催地では、楽しめる催しや記念事業など運営に対する工夫がなされており、参加者が競技以外にも楽しめる要素を含めた開催を心がけています。

全国大会では47都道府県から代表が集うことで、U12世代では最も大きな規模の大会となっています。開催時期は3月の最終週に行われることから、U12世代最後の大会となっており、各都道府県から推薦された高いレベルのチームが参加することや年齢的にU15カテゴリーにつながる意味でも重要な大会としての位置付けになっています。全国大会やブロック大会では、その競技力の高さから勝利至上主義による戦略、戦術に頼った指導や暴言暴力につながることを懸念されるため、マンツーマン推進による取り組みやインテグリティ精神に基づく人間力や指導力、組織力を高めることで育成マインドの醸成を進めています。

2 都道府県リーグ戦

U12世代は「育成年代」であり、その年代で得られるものは大きいと考えられています。ミニバスケットボールにおいても、まさしく心も身体も成長段階であり、成果よりも効果を重視した指導と環境が求められます。これまで日本のスポーツ界においてはトーナメント文化が根付いており、一発勝負での勝敗に価値を見出してきた背景があります。これは、日本人がこれまでに置かれてきた環境や体格的な問題から、スポーツ界においても成果を求めるがあまり、諸外国に対抗するための手段として、知恵や精神論により一発勝負での結果を賞賛してきたことにもあると考えられます。

しかし、近年においては生活スタイルや食文化などによる体格の変化や、効率的、効果的なトレーニング方法に対する理解など、人間の成長に合わせた「育成」というキーワードが重要視され、その結果、これまで以上のパフォーマンスの発揮や成果が得られています。

欧米諸国においては体格だけではなく、この「育成環境」が整い、そのマインドが醸成されていることから、日本においても**各年代に応じた「育成」を行うことが、子どもたち一人一人にとって必要であり、その育成が子どもたちの明るい未来、日本の明るい未来につながっていくことを理解しなければなりません。そして、子どもたちを取り巻く大人たちが、その理解とともに、良い環境づくりと正しい「育成」に目覚める必要があります。**

都道府県におけるリーグ戦は、その育成環境の一つとしてトーナメント文化からの脱却を図り、子どもたちにとっては成功、失敗にとらわれることなく、何度もチャレンジをしながら、その経験をもとに成長するための「体験」の場であると言えます。都道府県リーグ戦は、47都道府県すべてのU12世代で行われています。参加チームには勝敗にかかわらず一定のゲーム数を確保し、保証された時間の中で、成果確認やチャレンジを繰り返すことができます。また、プレーヤーの経験や技術、年代にあわせて1つの登録チームから複数チームの参加を認めることや年間を通して対戦チームの入れ替えを行うなど、可能な限り近い年代や技術レベルでのゲームを増やして、子どもたちの成長の糧となる機会が増えるよう工夫しています。

このような環境を継続し、充実するためには、運営に携わる大人の意識改革が必要であり、「育成」というキーワードによる指導はもちろんであるが、運営スタッフとしての活躍も期待されることです。運営に際しては、リーグ戦に関わるすべてのコーチが役割をもって運営することが大切であり、それは子どもたちの環境を発展的に熟成させるために、関わるものすべてのコーチの責務として取り組むべき事業に拡大することが必要です。自チームの活動は大切であるが、その先に対戦相手や地区の仲間とともに楽しめる環境を広げていくという視野の広い発展的な意識を持つことで、コーチの育成に対する考えが広がり、その結果、自チームが置かれている環境が向上することにつながります。

3 オフシーズン

近年では、アリーナや体育館にも冷暖房設備が装備されていることが多く、夏でも快適にプレーができる環境となっていますが、本来はウインタースポーツと呼ばれ、秋から春にかけて行われることが通例となっています。

日本国内においてのアマチュアスポーツのカレンダーは、学校や社会の流れと同様に4月から翌年3月までとなっていることが多く、特に学校の部活動などを中心に大会設計が行われてきたことから、バスケットボールカレンダーも4月から翌年3月で計画されることとが多くなっています。部活動は、「体育」という教育的観点から学校教育の中でのプログラムであり、「スポーツ事業」とは目的が異なります。部活動でのカレンダーがスポーツカレンダーとなることでスムーズなつながりを作っていると言えます。一方で、このカレンダーを継続するがあまり、他の競技や事業との重なりが生まれることから限られた競技種目のみを年間を通して行うこととなり、そのことが様々な課題を生み出しています。



例えば、その1つに夏場の活動です。先に述べたように近年は冷暖房完備の施設が増え、夏でも快適にスポーツを楽しめるようになりました。しかし、冷暖房完備の施設を使用しての活動は施設数や費用面で多くの利用が困難であることから、まだまだ身体的な負担は解消される環境とはなっておらず、ここに金銭的な負担と身体的負担という課題が発生しています。また、欧米諸国においては各競技種目においてシーズン制による活動期間のズレがあるため、季節に応じた複数のスポーツを楽しむ文化があります。このことにより、バスケットボールだけではなく様々な体験から、感性も豊かになり、楽しいスポーツライフを送ることも可能となります。

しかし、日本においては多くの競技種目が1年間の活動となっていることから、限られた競技種目を極めるという慣習があり、休むことや他のものに手を出すことを良しとされてこなかった風習があります。このことから各競技種目間でのプレーヤーの確保競争が行われたり、忠誠度が評価につながるなどの狭い視野での活動が行われているという課題も生まれています。

ミニバスケットボールを通じた育成では、スキルの習得だけではなく人間形成も大切であり、豊かな人間を生む環境を作るには、指導方法や施設などの環境整備だけではなく、活動にメリハリをつけた心の育みも必要です。そして、家族との時間を作ることがなによりも大切です。そこで、**バスケットボールカレンダーがその環境を生み出しやすくなるためのものとなるよう、バスケットボールにおいての大人の学習期間、子どもの学習期間、子どもの練習期間とゲーム期間、オフシーズンなどを明確に設計する必要があります。大人にとっても、子どもにとっても、ゆとりのある楽しいスポーツ活動となるようにしなければいけません。**

